ISSN 0385-5368

関西道路研究会会報

2014
Vol. 38

Kansai
Road Study
Association

●高耐久化を目指したプレキャスト床版による床版取替え
●「宗右衛門町通り」の道路整備事業について
●阪神高速2号淀川左岸線（島屋～海老江ジャンクション）の開通
●神戸市自転車利用環境総合計画の推進
●本町通りにおける「自転車レーン」の整備と効果について
●東日本大震災におけるガソリン供給停滞問題の考察と南海トラフ巨大地震への応用に向けて
●道路舗装のひび割れ率の簡易評価手法の検討
●技術者の倫理的判断と行動について
●鋼橋の製作技術の発展とその背景
●東北被災地の視察ツアー

講演要旨

講師：植彌加藤造園株式会社代表取締役社長　博士（学術）　加藤友規　氏

加藤氏は、平成 2 年 3 月千葉大学園芸学部園芸経済学科卒業、同年 4 月、植彌加藤造園株式会社入社、現在、同社代表取締役社長　平成 24 年 3 月京都造形芸術大学大学院博士課程修了　学術博士号取得　植彌加藤造園株式会社は、創業嘉永元年（1848）、七代前の加藤吉兵衛が大本山南禅寺の御用庭師を務めて以来、代々造園業を営む。文化財庭園の維持管理、寺院庭園、別荘庭園、公共庭園の伝統技法による整備、管理とともに各種住宅庭園の施工管理も手がけ、幅広い分野で高い評価を受けている。

はじめに

どうも皆さん、こんにちは。京都から参りました加藤でございます。今日は、皆さまと一緒のご縁をいただきまして、本当にありがとうございます。

今日のお話は、京都の風景そして京都のお庭のことをお話しさせていただきます。その後、京都の伝統的建造物群保存地区で見られる道を一緒に散策できればと思っております。造園の現場、庭の中で出会う新しい舗装技術なども紹介しまして、また皆さん方からいろいろお知恵を拝借できればと思っております。そして最後に、いろんなお庭の中での道ということで、道路というよりは庭師が感じ取れる道というところを今日はお話しさせていただきます。

弊社には職人たちが 60 名ほどおります。創業から 165 年がたっていますが、おかげさまで、毎日の仕事の面白さ、庭の楽しさを満喫させてもらっております。

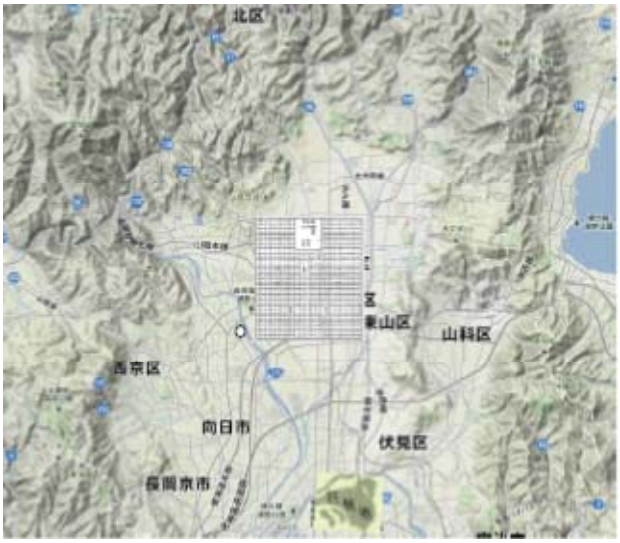
植彌加藤造園㈱

けいはんな記念公園

本社と別に、こちらは、けいはんな記念公園といいまして、学研都市、京都の精華町にあります。平成 18 年 6 月から指定管理者という立場で管理運営を私の職場のほうが携わらせていただくようになりました。

我が国の誇り　京都の風景

現代は、重機を使い近代的な技術を用いて、けいはんな記念公園のような大規模公園までもつくれる力を我々庭師は習得したわけですが、もともと京都で蓄積されてきたもの、1200 年間、都ができて蓄積されてきた、京都の風景や庭の中にあるものを一緒に見てまいりたいと思います。



平安京と京都の地形

京都を上空から見下ろしますと、東山、北山、西山とあって、これが京都三山といわれています。今日は、京都三山の中の東山を中心にしたお話をします。平安京の北に内裏、いわゆる御所があって、内裏の南に朱雀大路という大通りが通っています。天子南面、天皇さんは南を向いて、左側が左京、右側が右京となり、御所の中の紫宸殿前の植木も、右近の橘、左近の桜となります(*1)。

平安京は当時、このように四神相応ということで、北の船岡山を玄武、東の鴨川を青龍、南の巨椋池が朱雀となり、西に白虎の道があります(*2)。

こういう四神相応、風水にかなった地であるということで、1200 年間、京都は景色を育んできたのかなと思います。

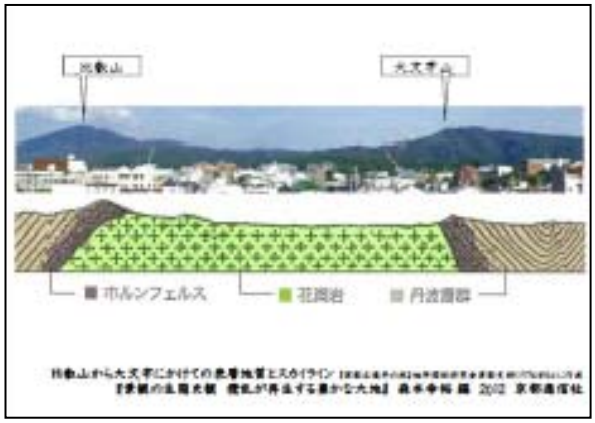
京都の東山の景色です。向かって左側に比叡山、右側に大文字山（如意ヶ嶽）がある風景が、1200 年の間、京都の人々に愛されてきました。江戸時代初期、松尾芭蕉の高弟の１人に服部嵐雪（はっとりらんせつ）という方が、この景色をたたえて歌を詠んでいます。京都の東山に、比叡山がぽこっとあって、こちらにもぽこっと大文字山がある。これがまさに「布団着て寝たる姿や東山」と詠まれた情景であります。

東山 比叡山から大文字山を望む情景

服部嵐雪が愛でていた、この稜線を少し掘り下げて見てみたいと思います。実は、２億５千万年前、京都は海の底だったといわれています。１億５千万年前ぐらい、恐竜がうろうろしていた時代に陸化しました。ですから、京都が海であった１億年ほどの間に、海の中の放散虫などのプランクトンの殻が堆積して岩となりました。この堆積岩の山が京都一面を囲っているわけですが、岩石の専門の方は、これを丹波層群といっています。

そんな中で、京都の人たちが愛でてきた比叡山と大文字山のこの間に、８千万年前、火山活動でマグマが隆起して後に冷えて岩となりました。８千万年の歳月の中でそれが風化してきて、今のような山並みとなったといわれています。そういう壮大な自然の輪廻のもとで、この愛されている景色が醸造されてきたわけです。

マグマが固まってできた石を花崗岩といいます。御影石もそうですね。京都では、これを白川石といいまして、まさに白川の地でこういう石が採れているというのは、８千万年前の物語によるものなんですね。



比叡山から大文字にかけての表層地質

マグマの端部では、従前の堆積岩が、熱変性を受けたので、ホルンフェルスという岩石になってしまいました。かなり硬い石ですので、８千万年の歳月がたっても、風化せずに山の峰として残っています。ちなみに、大文字山のふもとの銀閣寺の庭園には、このホルンフェルスが使われております。また、京都の枯山水の庭園には、花崗岩である白川の砂利が使われています。皆さんも行かれたことがありますでしょうか、枯山水で一番有名な龍安寺の石庭に使われている白川砂利は、実は８千万年前の物語から始まるものなのです。

慈照寺（銀閣寺）

龍安寺石庭

もう一人、東山と縁の深い方で頼山陽（らいさんよう）という方がおられます。江戸時代後期の文化文政期に活躍された、文人、漢詩人です。

この方は京都の鴨川縁に庵を設けました。庵の名前を「山紫水明処」といいます。今も子孫の頼さんが、ここを大切におまもりされていらっしゃいます。山紫水明というのは、まさに夕日を浴びると東山の山々が紫色に見えるからですね。こういう情景が山紫水明と呼ばれ、昔から愛されております。

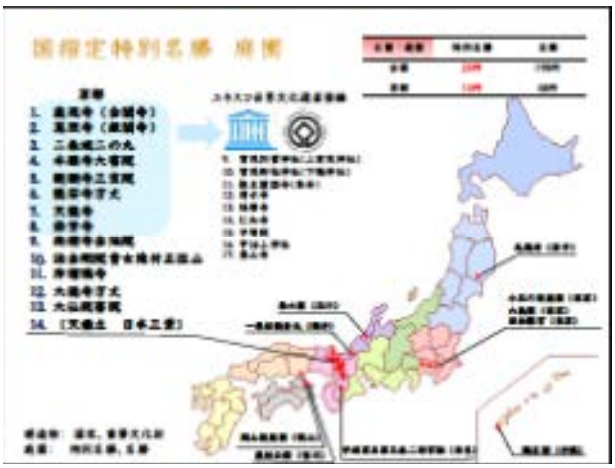
頼山陽の山紫水明処からみる東山の景色

我が国の誇り　京都の庭園

京都には文化財となっているお庭がたくさんあります。文化財は、建物の場合、重要文化財という言い方をします。さらにすごいものになりますと、国宝となります。

庭はどうかといいますと、記念物に当たります。記念物の中で重要文化財に相当するお庭のことを「名勝」という言い方をします。それのさらにすごいものが「特別名勝」です。つまり、お庭の国宝みたいな位置付けになるものを特別名勝という言い方をしております。

では、全国各地にどれだけの名勝、すなわち文化財としてのお庭があるのかといいますと、実は全国に 200 件ぐらいが指定されております。そのうち京都には 50 件ぐらいあります。４分の１は京都にあるのですね。さらに特別名勝になりますと、全国各地に 23 件あります。そのうち京都は 13 件です。国宝級のお庭がずらりと、京都にはこのように並んでおります。



全国の国指定特別名勝庭園

京都府内の国指定名勝庭園

特別名勝は国の文化庁が定めたものですが、中にはユネスコが世界文化遺産と認めたものもあります。

京都はそれだけ文化財のお庭が多いのですが、ここで日本庭園、お庭の様式の変遷をさらっとご紹介させていただきます。

実は、日本庭園の姿というのは、その時代の文化を反映しています。今日は、皆さんが観光でもおそらくおなじみの鎌倉・室町時代の京都の庭のことを少しご紹介させていただきます。

足利尊氏が室町幕府を開いて、京都五山第一位の天龍寺を創建しました。そのお孫さん３代将軍足利義満が、金閣寺の前身となる北山殿を開き、北山文化の礎を築いていかれました。また、南禅寺は、別格として五山の上位の立場でずっと君臨していました。そんな形で、京都には臨済宗の禅のお寺が鎌倉・室町の時代にたくさんつくられていきました。

その時代のこの方をご存じでしょうか。夢窓疎石（むそうそせき）といって、国師号をいただいたので夢窓国師というのですが、この方は造園家にとっては大変重要な方です。お坊さんなのですが、日本庭園の歴史上、この方はお庭を手がけることで一つの時代を築かれた方でいらっしゃいます。夢窓疎石がつくられたお庭の代表的なものに

夢窓疎石

西芳寺があります。ご存じでしょうか。皆さんはたぶん、苔寺という名前でご存じだと思いますが、正式名称は西芳寺です。

今は苔が一面に覆っていて苔の庭として有名ですが、実は、枯山水が初めて本格的につくられたお庭でもあります。この場所を洪隠山といって、この枯滝石組は夢窓疎石の作といわれています。

西芳寺　洪隠山　龍門瀑の枯滝石組

枯滝石組は三段の滝を組んで、滝の中に鯉が泳いでいる姿を表しています。こういう枯山水の滝石組の形式を、龍門瀑といいます。龍門瀑という言葉の由来は、鯉のぼりのお話がルーツとなります。「鯉は天に昇りて龍となす」といい、鯉が滝を上っていくと龍になれるということで、龍門瀑の図が中国の明の時代にいろいろ描かれております。日本でも登竜門といいますね。修行で乗り越えていく様を、鯉が龍になっていく様で見立てています。まさに登竜門ですね。そういう禅の思想をお庭の中に持ち込んでいるのが鎌倉・室町時代のお庭の特徴です。また、西芳寺には、当時、琉璃殿という建物がありました。今はありません。８代将軍足利義政は西芳寺を見て、琉璃殿のまねをして今の銀閣寺をつくったといわれています。

金閣寺と銀閣寺です。足利義満が、このようにキンキラの舎利殿（金閣寺）を創建されました。ここには、鏡湖池と呼ばれる美しい池があります。水鏡といって、水に浮かぶ風情を愛でるというのが日本庭園の見方で、その姿と水に浮かんでいるお月さまを眺めたりして、贅沢な時間を楽しみました。そのお孫さんの義政さんは銀閣寺を創建されました。銀閣寺では、西芳寺の瑠璃殿をまねた観音堂をつくられました。

鹿苑寺（金閣寺）

慈照寺（銀閣寺）

銀閣寺に行きますと、すごく注目すべき造形物があります。プリンのような形をしていますね。向月台（こうげつだい）といいます。砂盛りを銀沙灘（ぎんしゃだん）といいます。これは、花崗岩である白川石が風化して、砂になったものを盛り上げたもので、こういうものが庭の造形物にあります。

向月台

私も庭師としてすごく注目しておりますが、足利義政が銀閣寺を創建したときにはこんなものはなかったのです。これは江戸時代になってから、現場の庭師のアイデアでつくられた造形物といわれています。それが、同じ庭師として感銘を受けるところです。

池に砂が溜まっていくのですが、それを最初は土手に上げていただけでしたが、土手に置いておくだけでは面白くないと思ったわけです。場外搬出するのも何だしということで、庭の敷地内でこんなふうに遊び心で造形物をつくっていかれた。これは面白いということで、今日まで続いているのです。これが面白くなかったら、きっとつぶされていると思うのですが、やはりクリエイティブでいいものをつくって、その時代に受け入れられて、面白いものだと認識されると、後の時代にも受け継がれていきます。今、400 年の歳月の中、いいなとずっと思っていただいているからこそ、残っている。向月台はまさに、庭師がつくった当時のモダンデザインなんですね。

伝統的建造物群保存地区

～京都市の景観保存に見る「道」～

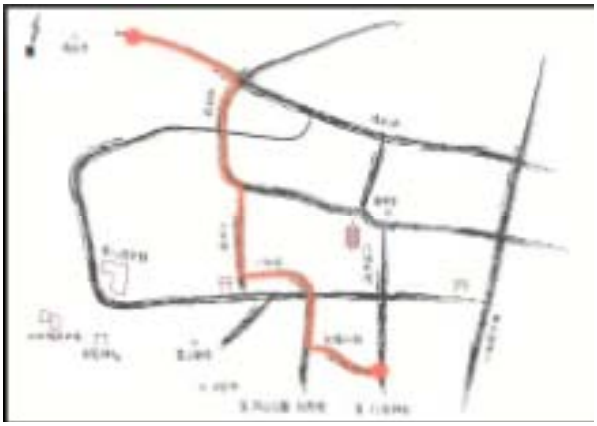
今までのお話は、一つの点を捉えた文化財として保護されたお庭でした。次は、景観としての面として保護しているところを見てみます。京都には、国宝・重要文化財、お庭としての特別名勝・

名勝とありますが、さらにこれを景観として、地域として守っていく制度があります。

昭和 25 年に文化財保護法ができて以降、いろんな法令が制定されて京都の景観というものを守っていく制度が整ってまいりました。昭和 50 年には、文化財保護法が改正されて、伝統的建造物の保存地区の制度が発足し、現在京都市内では上賀茂、嵯峨鳥居本、産寧坂と祇園新橋の４か所が指定されています。

京都市伝統的建造物群保存地区

今日は私の一番身近な清水さんから続く産寧坂を皆さんと一緒にここでお散歩ができたらなと思っています。



散策コース（産寧坂伝統的建造物群保存地区）

清水坂

朝、まだ人影のないときの清水坂はこんな感じです。年間 400 万人の観光客でおなじみですね。

清水坂を下りてきまして、今度は産寧坂のほうにすうっと坂を下ります。産寧坂をすたすたと下りていくと、こんな雰囲気です。道だけではなくて、横のいろんな店舗の敷地の中にもこんなふうに石畳があって、情緒ある景色となっています。

産寧坂

八坂の塔（幕末）

これは、幕末の写真に色を付けたもので、京都新聞社が出されていたものです。当時も八坂の塔を眺めて、産寧坂がありました。

二年坂

そして二年坂に下りていきます。二年坂をこんなふうに下りていって、それぞれの道沿いの店舗なりお宅が素晴らしいですね。路地もちゃんと石畳になっていまして、路地の向こうに八坂の塔が見えます。二年坂の道の横も、それにふさわしい風情漂うフロアになっております。

二年坂周辺の店舗

一年坂

一年坂（一念坂）まで歩いてきました。ここからねねの道に入っていきまして、ねねの道からの石塀小路も大変風情があります。細い道です。石畳の小路になります。こんな風情のある風景がずっと守られているということです。

ねねの道

石塀小路

ここでやっと、お散歩終了ということになります。

新しい舗装技術

島原のところで見掛けました。昔の花街のあった場所ですが、石畳風の舗装の形になっております。セメントミルクでブラッシュアップして、目地を切って石畳風の雰囲気を醸し出しています。

島原の新しい舗装（石畳風舗装）

舗装表面　アスファルト舗装＋ショットブラスト＋目地切り

京の街並み 石畳風に

2010 年の読売新聞に、京都のまち並みを石畳風にするぞと載っていまして、普通に石を張っていたら、石畳は 10 万円だけど、この工法だと３万５千円でできて、これはいいぞと書かれています。

そういう影響もありまして、私の職場にもいろいろ、お庭の中の修景工事をする際に、だいたいこの３つが、いつもクライアントからお話が出ます。一つ目は、アスファルトの上をショットブラストで洗い出し風に研磨する舗装です。そして、

洗い出し風舗装

石畳の舗装

先程の島原のような、目地を切って石畳風にするものと、従来の石畳の舗装です。

私の職場でもお庭の中でこんなふうに、洗い出し風の舗装にしたりもしています。しかし、私ら庭師はやっぱり石畳が大好きなので、こんなふうに石畳の道をつくることが多くなります。これは３年程前に施工させていただいた現場です。民間企業の玄関ですが、古風な門構えと石畳で厳かな雰囲気が漂っていますね。

造園における道

最後に、造園の中で、私ら庭師が道というと、どんな仕事をしているのかというところを、道に関する仕事を紹介させていただきます。

南禅寺参道と松並木の道

私の地元、南禅寺さんを航空写真で見てみます。もともとこの辺一帯、江戸時代は南禅寺さんだったのですが、明治になって上地のために境内が縮小され、周りは別荘地となりました。南禅寺の本堂から三門をずっと、この道が昔からの南禅寺の参道です。今は松の木だけと違って桜があり、モミジがあり、賑やかな参道になりました。

これは、無鄰菴といいまして、山縣有朋さんが南禅寺の参道沿いにつくられた別荘です。今は京都市の所有になっておりますけど、参道沿いの松並木がお庭の後ろの参道のところに写っています。

無鄰菴（明治 42 年『京華林泉帖』より）

明治になりまして、南禅寺の参道沿いには別荘がたくさんつくられました。こちらは、對龍山荘という別荘です。先ほど、京都には 50 件ぐらい文化財としての名勝庭園がありますと言いましたが、その名勝庭園のひとつです。

對龍山荘から東山の山なみ

お庭というのはお庭の敷地だけと違って、借景と一体となって楽しむものですから、支障木がちょっとうっとうしくなってきたなということで、お手入れすることとなりました。すると、比叡山から大文字山の稜線がすらっと見えるようになって、お庭の中がよくなったなと喜んでおります。

ただ、実は、これは對龍山荘内の樹木の手入れをさせていただいたのではなくて、背景にある湯豆腐の順正さんの敷地の上にある樹木を手入れさせていただくことによって、對龍山荘のお庭から眺める東山の稜線を確保する、そんな仕事をさせていただいたのです。

『都名所図会』は 1780（安永 9）年、江戸時代の名所図会です。南禅寺の三門のところを、ずらっと松並木が描かれているのが分かります。

都名所図会（1780）

都林泉名勝図会（1799）

明治44年『京都名勝写真帖』より

こちらも南禅寺の参道にある湯豆腐屋さん、丹後屋さんですね。のれんも描かれています。この地は今も湯豆腐屋さんで賑わっています。

明治 44 年、南禅寺の三門の前が松の木でうっそうとしている写真です。この楼閣から石川五右衛門が「絶景かな」と言ったという伝説が残っているところです。現在はモミジとサクラが観光客に愛されている時代ですから、三門周りにもそれらが植えられています。昔の松だけの景色から現代人好みの景色になってきたわけです。

この写真は逆から三門を見ました。モミジが目立ちますね。奥に桜があって、この辺から松がずらっと並んでいます。これが南禅寺の三門前です。

南禅寺の大玄関のところを紹介させていただきます。この日は開山忌というお寺の儀式があって、大事なお客さまがここを通って入ってこられるための玄関になります。

この玄関に敷いてあります敷石がどこから来たかといいますと、京都の市電の敷石です。私のお爺さんと親父が、昭和 45 年につくらせていただきました。この市電は京都市内一円を走っておりましたけど、昭和 53 年には全部廃止されました。こういった敷石が、今は清水寺の産寧坂のところとか、二年坂、石塀小路などにも利用されております。

南禅寺三門

法堂から三門を臨む

南禅寺本坊　大玄関

大玄関施工前

大玄関竣工（1970）

個人の庭に見る道

次は旅館の最近の仕事、道の事例を紹介します。こちらは、「星のや京都」という嵐山にある旅館の道です。私ら造園家は、こういう小さな道のことを延段と呼びます。大きな道路をつくっていらっしゃる皆さん方は、延段というような言葉は、あまりぴんと来ないかもしれませんが、庭師にとっての道は、これぐらいのやつを延段と呼んでおります。星のやさんは、ひとつずつの部屋の前に延段を、その玄関用の、そのお部屋、お部屋に対応した延段にしております。

星のや京都

星のや京都での延段の施工

これは今、一生懸命工事中で、どれぐらい延段が通路に張り出すのがいいかなと、現場検証しているところです。

実際にこうやってつくり上げていきます。

ここは新しいモダンデザインを採り入れて施工をしているところです。

小石を一つずつ並べていきますが、一つの道は職人１人で仕上げます。１人でやり遂げて、職人の自分の作品として責任を持ってやります。

これが出来上がったところです。今は採れない賀茂川の真黒石を使った伝統的な延段の姿です。

真黒石や鞍馬石の延段のような、京都で昔から 1200 年ずっと培っている伝統的な技術と、最新のモダンなランドスケープデザインとの、調和のとれた空間となっています。

桂離宮の中に見られる道を見てまいります。離宮の中にも延段がありまして、延段は、「真（しん）、行（ぎょう）、草（そう）」の３種類に分かれます。書の世界の楷書、行書、草書と同じように、しっかりした形式的な真の延段と、ちょっと崩した行、さらに崩した草という延段がありまして、桂離宮の中にもそれぞれの延段がつ

くられています。

これがしっかりとつくり上げた真の延段です。こちらの外腰掛けのところ、行の延段です。ちょっと崩している感じですね。こちらは草の延段。かなり崩していったような形です。

庭師にとって道というと身近なものは延段で、その延段の中にも、真、行、草を用いてどんな個性を、そこの景色と合うような道はどんなものがいいかなということを思いながら、こんなふうに道をつくっております。

これは桂離宮の園林堂の中の景色ですが、これは実は、昭和の仕事です。桂離宮に昔からあった道ではなくて、新しいデザインです。最近の斬新なデザインで、このような軒内にこだわってつくってあります。

桂離宮の御幸道をご存じでしょうか。桂離宮の中の沿路には、細かな石を敷き込んで、かなり芸が細かいといいますか、粋な道をつくっています。ちょっと細かく見てみましょう。

アップで見ると、こういった石をごちゃごちゃと敷き込んでいます。よく見てみますと、実は雑です。延段で石と石を組み合わせるときは、ものすごくきちっと目地を考えながら石と石を合わせ込んでいくのですが、これは広く全体で見ていくような姿ですから、ちょっと適当に当てているなというところも、よく見ればあるんですけれども、全体で見ればすごく美しい。さっと全体的に見るときれいにできております。こういう仕事を「あられこぼし」と、私たちは呼んでいます。庭師にとっては大変楽しい仕事です。

あられこぼしの道がありまして、桂離宮に行かれたときにお気付きになったでしょうか。桂離宮に入ったところですけれども、松がぼんと止めてありまして、住吉の松といい、別名、衝立松という名前が付いていて、なぜこんなことをしているのかというと、日本庭園の見せ方の独特の精神性なのですね。

玄関から入ってきて、この松がなかったら、もうすでに、ここから、「あ、なかなか広々とした池があるやん」みたいな感じで、お庭の広大な雰囲気がパァッと見えるんですけど、日本庭園の誘導の仕方はもったいぶるんですね。「まだ庭に入ったばかり、お楽しみはこれからやから、まだ見んといて」という感じで、いったんここで広大な景色を隠しておくのです。次の場所へ誘導して進んでもらうために、ここでは衝立となる松の木を植えておくという、そんな工夫がされています。

道路研究会の皆さん方と一緒に、講演会で道についてのお話をしようと思ったときに、庭師として私がイメージしましたのは、私は大きな高速道路などをつくったことがありませんので、こういう感じのほっそりとした風情のある道が、私のような庭師にとっての道なんですね。

今日はお話をいろいろさせていただきまして、エンジニアの皆さん方にとっては専門的にためになることなんかあまりなかったかもしれませんが、京都の庭師の仕事というものを垣間見ていただきました。

京都の庭師の仕事は大変楽しいです。いろいろな方に京都の庭園をご覧いただいて、素晴らしいなと思っていただける庭の景色を永年かけて醸造していくといいますか、まさにワインを何年もかけて醸造していくのと同じように、私たち庭師は、そこの授かっている景色をずっと育んでいく、醸造していくということで、仕事が楽しくて楽しくて仕方がないのです。そういった庭師の楽しい思いを今日は紹介させていただき、本当に光栄な思いです。

私らはハードとしての道をつくっているわけですけれども、道という言葉はすごいですね。道路、道というのは生き方や人生を表しているようなものですので、そういう意味では、道路研究会さんというとハードの技術だけと違って、人生そのものが良くなるような、そんな研究会の皆さんの集まりであるのかなと思いまして、なおさら今日は、本当にいいご縁を頂戴したと思います。

皆さん方の道ともども幸せなものであることを祈念いたしまして、私のお話とさせていただきます。本当にどうもありがとうございました。

＊１：　現在は桜ですが、平安時代には梅が植えられていました。

＊２：　近年はこの説が主流ですが、四神を別の場所に充てる説もあります。

編集後記

（一財）都市技術センターが事務局業務をお引き受けして３回目の会報編集となりました。この間、原稿募集には毎回ハラハラしております。今回は４特別委員会の皆様にも特にお願いしました結果、合計10本もの原稿が集まりました。皆様貴重な時間を割いて執筆していただきありがとうございます。感謝！

RT, TM, HY

関西道路研究会　会報
第３８号

２０１４年３月発行

発行　関西道路研究会

〒541-0055
大阪市中央区船場中央２－２－５
船場センタービル５号館２階
一般財団法人都市技術センター内
Tel 06-4963-2540　Fax 06-4963-2397

印刷　株式会社関西青写真
Tel 06-6446-1212 Fax 06-6443-3221

躍進する関西道路研究会をシンボライズしたもので、背景の青は明るい未来・躍動を、また「K」は本研究会の頭文字により無限に伸びゆく道路を表している。

関西道路研究会　　２０１４年３月発行